心理臨床家のプロフェッションの生成と継承Ⅰ[1]

―理想の心理臨床家の追及―

神谷真由美・岡本祐子・上手由香・奥田紗史美・前盛ひとみ・深瀬裕子

Generativity of professional identity in a clinical psychologist Ⅰ:
Pursuit of the ideal clinical psychologist

Mayumi Koya, Yuko Okamoto, Yuka Kamite, Satomi Okuda, Hitomi Maemori, and Yuko Fukase

本研究は，一人の心理臨床家のライフストーリーを詳細に検討することで，心理臨床家の専門家アイデンティティの生成と継承の過程について明らかにすることを目的とした。心理臨床家の専門家アイデンティティの形成には，事例検討会などを通じて，心理臨床の雰囲気を感じ取ることに加え，熟練した心理臨床家に理想化・同一化し，深く心理臨床の世界に没入していくことが必要であることが明らかになった。また，心理臨床家の専門性の継承には，その心理臨床家独自のあり方を次世代に伝えようとする姿勢よりも，先代から受け継いできた“経験”を次世代に伝える姿勢が重要となることが示唆された。また，心理臨床家としての専門性を次世代に継承する過程のなかで，同時に自身の専門性の深化も生じることが明らかになった。

キーワード：専門家アイデンティティ，世代継承性，心理臨床家

問題と目的

心理臨床家とは，“大学や大学院で心理学その他の関連科学を学び，心理学的手法を使って，精神病院や児童相談所など社会の心理学的･福祉的領域で働いている人たち”(鑪, 2000) のことである。その資格となる臨床心理士が 1988 年に誕生して以降，2011 年度までに 24666 名の臨床心理士が輩出されてきた。また，1996 年度から臨床心理士資格試験を受験するには，資格認定協会の指定を受けた臨床心理士養成に関する大学院修士課程 (博士前期課程) の修了が必須となった。2012 年 7 月 1 日現在では，全国で 167 の大学院が指定大学院，専門職大学院となっている (藤原，2012)。この指定大学院，専門職大学院の制度により，教育・訓練システムの整備を図ることが可能となり，一定水準以上の基本的な知識と技能を有する心の専門家としての心理臨床家の養成が可能となった。

[1]本研究は，2009-2012 年度　文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C)「3 専門職種における生成継承性の心理的特質と発達過程に関する研究」(課題番号 21530691，研究代表者 岡本祐子) の一部として行われた。

しかし皆藤 (2012) によると，臨床心理士 (心理臨床家) の専門性とは，眼前にいる生身のかけがえのないひとりの存在に向き合うことができるかということであり，教科書に則ったような対応では，ほとんどの場合，必要充分ではない。また日本の現実は，心理臨床家の専門性を維持するために必要な，教育訓練・法的規制と保護・倫理性・免許・学会といった点が，いまだに未分化な混沌状態にある (鑪，2000)。それでは心理臨床家の専門性とは，いったいどのようなプロセスを経て，形成されていくのであろうか。また，次世代の心理臨床家を育成するためには，どのような工夫が必要であるのか。これらを明らかにすることは，心理臨床家の置かれる状況，求められる役割が絶えず変化し続ける現代社会において，クライエントの福祉のため，その専門性を維持していくことに貢献すると考えられる。

Erikson (1950 仁科訳 1977，1980) は，人生を第Ⅰ段階 (乳児期) から第Ⅷ段階 (老年期) の 8 つの発達段階に分け，各発達段階に顕著となる心理社会的課題を示した。8 つの心理社会的課題の中から，上述した問題と関連する第Ⅴ課題 (アイデンティティ) と第Ⅶ課題 (世代継承性) を紹介する。第Ⅴ段階のアイデンティティ (identity) は，職業選択や第 2 次性徴を経験する青年期に顕著となる心理社会的課題である。アイデンティティとは，自分は他者と違って自分であるという感覚と，自分はこれまでいかにして自分であったのかという感覚である (Erikson，1950 仁科訳 1977，1980)。アイデンティティの形成は，子ども時代のさまざまな同一化を選択的に拒絶したり，相互に同化させたり，新しい形態に統合したりすることから生じる (Erikson，1968 岩瀬訳 1969)。心理臨床家としての専門家アイデンティティの形成を捉える上で，重要な視点であると考えられる。

第Ⅶ課題の世代継承性 (generativity) は，中年期に顕著となる心理社会的課題である。この generativitiy とは，generate (生み出す) と generation (世代) を掛け合わせた Erikson の造語である。productivity (生産性) や creativity (創造性) ではなく，このことばを使ったのは，次世代や生成的という概念を越えてより一般的に，生み出されたものをケアするという方向性を含ませたいためである。generativity は，次の世代や自分が生み出したものを信頼し気づかい見守りはぐくんでいく傾性をさす。つまり generatibity は，個人を越えて世代と世代をつなぎ，長い時間軸で次世代や将来世代をケアし責任を果たしていくために必要な概念である (やまだ, 2003)。また竹内 (2012) によると，伝統芸能や工芸の技能，教師の専門的経験などの“経験の伝承”というテーマを扱う際には，個人を世代と世代に埋め込まれた存在として背景化させ，世代を超えて伝わる“経験”という側面を前面に押し出して捉えることが必要である。心理臨床家も，その専門性を形成するため，初心の心理臨床家 (スーパーヴァイジー) が自らの実践について，熟練した心理臨床家 (スーパーヴァイザー) から助言・監督・支持を受けるスーパーヴィジョンが必須の学習となっている (鑪，2004)。スーパーヴィジョンでは，スーパーヴァイザーがこれまで培ってきた臨床の経験を，スーパーヴァイジーに伝えるという側面もある。そのため心理臨床家の専門性を次世代に伝えていくには，竹内 (2012) が指摘するように，世代を超えた“経験”という側面に注目していくことが重要であろう。

本研究では，一人の心理臨床家のライフストーリーを詳細に示すことで，以下の 2 点を検討することを目的とする。①心理臨床家としての専門性の生成，深化の過程について明らかにする。②自身の専門性を，次世代にどのように継承しようとしているか明らかにする。

方　法

対象者　上地雄一郎先生。面接調査時，56 歳であった。広島大学文学部を卒業し，博士課程前期から広島大学大学院教育学研究科で心理学を学ぶ。現在は，岡山大学大学院教育学研究科の教授であり，臨床心理士の養成を行っている。臨床活動は，医療機関をはじめ学生相談，スクールカウンセリング，産業カウンセリングなど多岐にわたる。臨床心理学のなかでも，特に精神分析を専門とし，Kohut の自己心理学に関する研究で 2010 年に学位を取得している。筆者が上地先生に面接調査の依頼を行った理由は，もともと面識があったことに加え，上地先生の事例論文 (上地，2005) を読み，境界性人格障害のクライエントに対する丁寧な対応に感銘を受け，心理臨床家としての専門性の深さを感じたためである。

手続き　2011 年 9 月に，1 回 2 時間半の面接調査を 2 回実施した。面接内容は，許可を得て録音した。

面接内容　本研究は，2009-2012 年度　文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C)「3 専門職種における生成継承性の心理的特質と発達過程に関する研究」の一部として行われた。5 名の若手心理臨床家が，前の世代にあたる心理臨床家 1 名に面接を申込み，それぞれ心理臨床家のプロフェッションの生成と継承について，調査を行った。事前に討議を行い，面接内容について一定の方向性を共有した (表 1)。面接調査では，まず臨床心理学や心理臨床への興味のきっかけを尋ね，その後，専門性を身に付ける過程，次世代の育成について尋ねた。基本的には，上地先生に自由に語っていただき，その中で，筆者が疑問に感じたことを適宜質問した。

表 1　5 名の調査者で共有した面接内容

Ⅰ．専門世界への方向付け・志向までの段階

Ⅱ．専門世界への参入 (専門的訓練の始まり) から自立までの段階：心理臨床家としてのアイデンティティ形成のプロセス

(1) 先代 (自分の先生) から何をどのように学んだか。
(2) 専門家としてのアイデンティティ形成の中での危機や転機。
(3) 「一人前になった」という感覚はどのようにして得られたのか。

Ⅲ．専門家としての自立・深化・拡大の段階

(1) 専門家としてのアイデンティティの発展・生き方 (対象者のアイデンティティを多角的に捉える)
(2) 心理臨床的ケア力をどのようにとらえ，どのように実践しているのか。

Ⅳ．次世代の育成の段階：自分の身につけた専門性を後進に伝えていくためにどのような視点を持ち，工夫と実践を行っているか。

(1) 「後進」として意識している人は，どのような人か。
(2) 専門性の次世代への継承の具体について
(3) 自分のライフサイクルと臨床活動との関わり
(4) 先代（師）からの学びを，今どのように捉えているのか。
(5) 次世代とのかかわりにおいて，伝えたいことは何か。
(6) 次世代へ「伝える」ことを通して自分自身の成長を感じることはあるか。
(7) 現役引退と引退後の活動について。

分析方法　録音記録をもとに，逐語記録を作成した。岡本 (2011) の専門家アイデンティティの 4 つの段階 (Ⅰ.その専門世界への方向付け･志向までの段階，Ⅱ.専門世界に参入から自立までの段階，Ⅲ.専門家としての自立・深化・拡大の段階，Ⅳ.次世代の育成の段階) に沿って，語りを整理した。上地先生の語りを「　」で示した。

結果と考察

Ⅰ．専門世界への方向付け・志向までの段階：自らの悩みが心理臨床への原動力となる

上地先生は文学部に入学しており，心理学を専攻としていなかった。心理学に関心を持ち始めたのは，自らの悩みからである。当時は，「自分のことで悩み，自分の家族のことで悩み，人生で悩み」という状態だった。「対人恐怖的」で自信がない青年であり，父親との関係もよくなかった。父親は酒乱で，毎日酔って騒ぎ，仕事もできなくなった。実家は貧しかったため，大学入学のために実家を離れてからは，経済的にも厳しかった。そのような悩みを抱えた状態のなか，教員免許をとるための必修授業であった教育心理学の授業で，心理臨床の恩師となる鑪先生と出会う。鑪先生の授業は「ほとんど臨床心理の話」で，「よく分からないけど，鑪先生が持ってる世界，臨床の世界に惹かれた」と言う。それ以降，教育学部心理学科で開講されている心理学の授業の多くを履修した。しかし，鑪先生の臨床心理学の授業の単位はとれなかった。その理由は，『あなたのアイデンティティについて書きなさい』というレポート課題が提出できなかったためである。このことについて，上地先生は以下のように述べている。

> *「レポートが僕にとってはとても難しすぎて。考えてるとね，自分のことってありのままに書けないんですね。自分を美化する書き方か自分を卑下する書き方をするんで，それがすごく嫌で自己嫌悪に陥って。ありのままになぜ書けないんだろうって。それは，僕自身のアイデンティティが混乱していて,自分らしい自分がわからなかったからだろうと思うんですね。何か書いて出せば単位はもらえたかもしれないんですけど，でもあえて出さなかった」。*

とりあえず何か書いて，レポートを提出すればいいと頭では分かっていても，自分について書くと，どれも美化か卑下しているように感じてしまう。そのくらい当時は，混乱した状態であったと考えられる。そのため，自らカウンセリングを受け，エンカウンターグループも経験し，上地先生の中で臨床心理学への興味・関心が次第に深まっていく。教育学部心理学科への転学科を希望したが，定員数の問題から不可能であった。そのため文学部を卒業し，大学院から臨床心理学を学ぶために，教育学研究科に入学することになる。転学科はできなかったが，その過程で，心理学科長をはじめ，さまざまな方に相談に行き，親身になってくれる方もいた。心理臨床への関心は，「対人恐怖的だった」上地先生を動かすほど，強いものだったと考えられる。しかし一方では，心理臨床家になることへの自信のなさもあったようである。以下に，関連する語りを提示する。

「すごく臨床に関心が向いてて。ただ自分自身が，カウンセラーができるかと思うと，まったく自信がなかった。自分にそれができるという自信が。思い上がったりするところもあるんですけど，基本的に自己卑下する人間で，自信がない人間でしたから。とても自分が将来カウンセラーになりたいとか心理士になりたいとか，そんな事は言えなかったです。ただ，心の中ではそういう臨床家になりたいっていうのは，無意識にはあったと思うんですけど。意識的には言えない」。

Ⅱ．専門世界への参入（専門的訓練の始まり）から自立までの段階

(1) 理想化と同一化による専門性の形成

大学院で学んだことは，「学派に拘らずやらなければいけない，臨床の基本」であると言われる。上地先生にとって，心理臨床家の専門性を習得していく過程は，「ある種の文化を受け継ぐような」感覚であり，単に本を読んだり，ロールプレイをしたりするだけで身についていくものではなかった。カンファレンスや事例検討会でのコメントを通して，それぞれの先生の「ワールドを通して（臨床の）雰囲気みたいなものを吸い取って」いった。その中で，専門性を形成していった。また，専門性を身に着けるために大事なこととして,「月並みだけど同一化」と言われる。上地先生の場合は，鑪先生をはじめ，スーパーヴァイザー，先輩にあたる鑪先生の弟子達への理想化から，取り入れと同一化が生じ，心理臨床の専門性を吸収していった。その過程を，以下のように述べている。

「例えば僕が受けたスーパーヴィジョンでは，ケースに即して『こうしてはどうか』と言われる。そこでスーパーヴァイザーへの理想化にも助けられて，取り入れと同一化が起きていく。いろんな人に同一化して取り入れたものを取捨選択して，総合して，アイデンティティが形成されるプロセスと同じ。そこに必要なものがあるとしたら，その人との関係に本当に深く沈潜する，忠誠を尽くす。しっかりその人との関係に入って，大なり小なりその人を理想化しながら吸収していくことは重要でしょうね。その中で，向こうとの信頼関係もできて，継承されていくものではないか。やがて，そのような理想化から脱けだしていくときも来る。だけど，やっぱりそこに忠誠を尽くしてみる。そして少し自分を広げていく。そういうことが必要になってくる」。

恩師や先輩ひとりひとりの心理臨床の世界に触れ，スーパーヴァイザーへの理想化・同一化を通じ，心理臨床家としての専門性を形成してきた。その過程は，上地先生自身が言われているように，Erikson (1950 仁科訳 1977, 1980) の提唱したアイデンティティの形成プロセスと同一である。

(2) 恩師の世界にいることの歓び

上地先生にとって，鑪先生は「ある種のパンテオン」であった。鑪先生が持ってくるものの中には，いろいろな精神分析の学派や理論があった。周りの学生も，いろんなものを恩師から紹介され，各々，興味のある物について勉強していった。しかし，それらは全て「鑪先生の世界の中にある。芽を与えてくれたのは鑪先生」であり，それゆえに皆にとって「大きい存在」である。

また，大学院から心理学講座に入った上地先生は，「途中から入った」思いが強く，「よそ者コンプレックス」があると言う。加えて，興味をもつ理論も恩師の本流から外れた所にあった。しかし，鑪先生から「評価されてないと感じているわけではなく，放っておいても，自分の好きなことをどんどん勉強している奴だ，くらいに思ってくれてるような感覚」があった。恩師から見守られている感覚，認められている感覚が，上地先生の心理臨床世界への没入を促したと考えられる。

また現在も，鑪先生と会うことは数少ないが，「たまに何かの席でちょっと会って，話すだけでいい。取り巻きでいることへの歓びがある。師匠を中心に，弟子連中が集まる。それが妙に僕は嬉しい。その中の一員みたいな感じの自分がいて」と言う。同様に，広島大学心理学講座の一員であることに関しても，「なんとか僕も，この中の 1 人になれた」という，「誇らしさを伴う歓び」がある。この背景には「よそ者コンプレックス」に加えて，上地先生の心理臨床の原動力とも関連する，原家族の影響があると考えられる。上地先生は父親との関係が悪く，心理学講座で恩師や先輩との関わることで，父親との間で満たされなかったものを満たしてもらったと言う。上述した恩師からの見守られ感は，心理臨床の専門性を深めるだけでなく，上地先生の存在自体を支える経験でもあったと考えられる。そのため，支えになる男性像を与えてくれた恩師の世界にいること，心理学講座の一員であることは，「誇らしさを伴う歓び」につながるのではないだろうか。以下に，関連する語りを呈示する。

「非常に父親の愛に飢えてる所があったと思う。何かの時に守ってくれる精神的に頼りになる父親。経済面も含めて，家のことを心配せずに，僕が自由にいろんなことができるようにしてくれる父親っていうのはいなかったに等しい。自分が精神的に破綻せずにやれてるのは誰のおかげか考えた時に，広島大学関係者の中で，鑪先生も含めて，父性を感じられる人とか，良い兄みたいな感じの人にいっぱい接したことで，父親に満たされなかったものを満たしてもらったし，支えにできる男性イメージを見せてもらった気がする。それで，何とか今の自分があるんじゃないかなと」。

Ⅲ．専門家としての自立・深化・拡大の段階

（1）心理臨床家アイデンティティの危機

上地先生が大学院生時代に吸収したのは，心理臨床の「核」のようなものであった。その後の専門性は，恩師や恩師の弟子と物理的な距離が離れたこともあり，「自分の中で自分が育てて」いった。自分に父子関係の問題があったことから，Freud とは異なる父親論を展開している Kohut の著作を読み，尊敬する心理臨床家のワークショップや講演に参加し，心理臨床の専門性を吸収していった。

34 才のときに，臨床活動が充実していた学生相談カウンセラーから，短期大学教員となる。そして，44 才で私立 4 年制大学に移り，52 歳から現職である。毎日のように心理療法を行っていた学生相談カウンセラーから，教員の立場になったことで，心理臨床家としてのアイデンティティが揺さぶられることになる。

「最初に苦労したのが臨床の場。学生相談の世界にいた時は，毎日が臨床。ところが教員になると，ほとんどの日が教務になる。短大時代は，できるだけ臨床の機会を増やそうとして，精神保健福祉センター (無給)，企業の相談室 (非常勤)，学生相談室 (兼任)，教育相談室 (非常勤) などを寄せ集めて，寄木細工のような臨床をやっていた。常に，その時代の僕にあったのが，専任カウンセラー時代はよかったということ。それはいつまでも付きまとっていた。1 日の面接時間を計算したら本当に少ない。時間数だけじゃないが，これで臨床家と言えるのかなっていうのはずっとあった」。

「ものすごく苦しみました。とくに 4 年制大学の教員になってからはさらに臨床に割ける時間が減った。たとえば卒論 (の指導) ばかり必死になってやってて，何やってるんだろうって自分で思いながら」。

臨床活動を中心としていないことへの葛藤は，上地先生の中で長期間続いていたようである。大学院の教授だった知人が,『最後は心理臨床家で終わりたい』と学生相談室の教授になったのをみて，「同じだと思った。僕もそれに続きたいと思った」と，うらやましく感じられたそうである。この葛藤は，裏を返せば上地先生がこれまで深く臨床活動に没入されてきたことや，心理臨床家としてこうあらねばならないという理想の高さがあらわれていると考えられる。対人恐怖的で，心理臨床家になることに自信のなかった青年が，心理臨床の世界に没入し，恩師や先輩，同じ志をもつ仲間と出会われた。また，学生相談という毎日が臨床の職場で，苦労もあっただろうが，それを上回る手ごたえがあったと考えられる。その中で，心理臨床家に対する理想，自分が心理臨床家であることの自負心が，次第に高まっていった。そのため，大学教員となって臨床活動にかける時間が減少したことは，ご自身の存在を揺るがすほどの苦しみをもたらしたと考えられる。突発性難聴にもなり，心身ともに苦しい思いを体験されてきた。上地先生自身も，「ものすごいストレスが溜まって，ここ (難聴) に来たと思う」と言われている。

(2)「全面的臨床家」から「臨床に軸足をおく大学教員」へのアイデンティティの変化

この葛藤は，家族や年齢の影響で変化していく。上地先生は現在，就学前後の小さいお子さん達 (その一人には障がいがある) がいらっしゃり，子育てに追われる日々である。子育ては，「エネルギーが吸い取られて，専門的な方で (エネルギーを) 発揮できない」が，毎日の子育ての中で得ているものも多いと言われる。また，年齢とともに体力の低下も感じ，境界性パーソナリティ障害のような重たいケースのカウンセリングは，「どんなにしたくても，体力的に無理」と感じられるようになった。このような現実的な問題から，臨床活動にあてる時間が十分にとれない状況で，ご自身の専門家アイデンティティが，以下の語りのように，次第に変化していく。

「本当に臨床家としてやろうと思えば，教職を捨て,たとえば開業するという道もある。ただそうすると僕の家のような所は時間的・経済的に大変になるから，大学の教員を辞められない。そうすると臨床を中心にできない。だから僕は全面的に臨床家であるとは言えない，心理臨床に関わる教員であるとしか言えない。これは僕のためでもあるけど家族のため。そう

考えた時に，もう仕方がないと思うようになり,自分が変わってきて，少し楽になってきた」。
「お前はもう全面的に臨床家であるとはいえないと言われても，しょうがない。こうとしか生きようのない人生ですからね。臨床家のアイデンティティは大切にしたいんですが，全体としてみたら僕は教員だ。臨床家の部分，研究者の部分もある大学教員」。
「自分の中で (こういうアイデンティティに) ぱっと切り替えたんじゃなくて，自然にそういう風になってきた。都合がよい方に変わっていくと言われるかもしれないんですけど。それでいいじゃないかって思うようになってきて，ちょっと最近楽ですかね。臨床もかつてのように長時間はできない。細々とやるしかない」。

理想と現実のギャップから葛藤状態が長く続いた中で，家族・現実的状況のため，次第に「全面的に臨床家である」というアイデンティティから「臨床家でもある大学教員」というアイデンティティに変わっていった。それにより，精神的に余裕ができた。「せめて 2，3 ケースぐらいはちょっと重ための人にも (心理療法的に) 取り組んでみたい」と，臨床に対する意欲も湧いてきたようである。岡本 (1985，2007) によると，中年期は自己の有限性を自覚することにより，これまでのアイデンティティを揺るがすような危機がある。その危機から逃げず，自分の半生を問い直し，将来への再方向づけを行うことで，アイデンティティが再確立される。上地先生も，ご自身は心理臨床家であるのに，大学教員を続ける限り思うように臨床活動ができないという限界を感じられ，中年期の危機に陥った。また，原家族のなかで「精神的に頼りになる父親」との体験が乏しく，ご自身のしたいことを自由にできる環境になかった上地先生が，関心を持ち，自信をつけてきた心理臨床を十分にできないことは，深い苦しみがあったのではないだろうか。その苦しみを越え，家族を重視した選択をし，大学教員であることに比重を置いて生きようと考えたことにより，アイデンティティを再確立していったと考えられる。

また，上地先生が最近特に感じることとして，「どんなにマイナスのものであっても，関わりの中で学んでいくことはある」ということである。これは，心理臨床の経験から得られただけでなく，子育ての体験からも得られたことである。心理臨床家アイデンティティの危機を乗り越えた後，これまでの心理臨床家としての経験，私生活での家族との関係が，専門性の深化に結びついていると推察される。

Ⅳ．次世代の育成の段階

(1) 場による継承の変容と時代を越えた継承

次世代には，「知識・技術を超えた，臨床感覚」を伝えていきたいと考えておられる。そのため大学院の授業では，「言葉では分からない，あるフィーリングを伝える」ことにエネルギーを注がれている。臨床経験の全くない大学院生には，口で説明しただけでは伝わりにくい。そこで，恩師が教材として映画を使っていたことから，上地先生も時間がとれる授業ではビデオ教材を活用して，臨床感覚を伝えようと心がけている。また，実習なども積極的に取り入れ，大学院生に心・体で臨床感覚を身に着けてもらおうと工夫しておられる。しかし「継承は，場に規定されて（その形が）違

い」，自身の院生時代と現在を比較して，以下のように語られている。

「鑪先生世代の先生は，いつまでも自分と繋がってる弟子を育てた感じがあるだろうと思う。それは鑪先生の存在の大きさと，あの時代だからありえた。今は指導教員をやっていても自分の弟子という感じはなく，自分もそんな気持ちはない。今，自分の弟子だって感じで院生に接すると，院生の方も違和感を感じるんじゃないかな。もうちょっと院生と指導教員の関係ってさばさばしてきた。だから伝統を受け継いでいってくれる，何かの血脈を受け継いでいってくれるというイメージは持てない。あくまで，専門家を養成している。そのために，自分の持ってる知識や技術，ある種の世界観と一体になったアートを伝えていきたいっていうのはありますよね」。

また上地先生が学んできた，クライエントと対面でじっくり関わり，その人の内的世界を成長させていくという心理療法が，現在では「隅に追いやられている」状況である。そのため今後，テクニックやプログラムのみを重視する時代にならないよう，強く意識して次世代と関わっておられる。時代による違いはあるものの，専門性を身につける上で，「本当の臨床家」の側で「臨床の雰囲気を通して学んでいく」ことの重要さは，現在も変わらないと考えておられる。また，次から次へと新しい技法に興味を持ち，飛びつく人は，「テクニックはいっぱい覚えるけども，核になる部分はない」ため，専門性が育たない。上地先生が同一化を行いながら専門性を身に付けてきたように，精神分析なら精神分析，認知行動療法なら認知行動療法と，一つに「忠誠を尽くしてみる」ことが必要となる。

上地先生の培ってきた臨床経験を，最も次世代に継承できている場は，スーパーヴィジョンやケースカンファレンスでのコメントであると考えられる。大学院生へのスーパーヴィジョンでは，そのケースやスーパーヴァイジーの成長のために，自分の意見を「押し付けないこと」を常に心がけている。最近は，上地先生が学んできたような精神分析を自分の臨床の柱にしたいという大学院生がほとんどいないため，「その中で僕の世界観 (精神分析) を伝えていくっていうのは，やっぱり苦労します」と難しさを感じておられる。しかし同時に，自身のこれまで培ってきたアセスメントや面接の力を「口伝えできている実感はある」と，手ごたえも感じられている。例えばスーパーヴィジョンやケースカンファレンスで，大学院生には見えていないであろうクライエントの問題の本質や面接プロセスを読み取り，コメントをすることで，自分の専門的な経験を伝えられている実感とともに，「無常の喜び」があると言われる。

心理臨床家としての専門性を形成していく上で，時代の変容と時代を越えても変わらない側面を考慮した上で，上地先生は次世代に，自分の学んできたものを伝えていこうと考えておられる。generativity とは，個人を越えて世代と世代をつなぎ，“経験”を伝えることである。いつまでも自分と繋がっている弟子を育てるのではなく，あくまで，自身の培ってきた知識や技術といった心理臨床の経験，自分が院生時代に体験した心理臨床の雰囲気を，次世代に伝えていこうと工夫する姿勢は，generativity であると考えられる。次世代に，上地先生の経験を伝えられている実感があるか

らこそ，上地先生は喜びを感じておられるのだろう。

(2) 次世代の育成から得られる「模擬体験」，自身の経験に由来する次世代への思い

スーパーヴィジョンを行うことで，スーパーヴァイジーに与えるだけではなく，自らの臨床に役立っている面を多く感じていると言われる。以下に，関連する語りを提示する。

「(スーパーヴィジョンしたケースは) 自分がやってないケースなのに自分がやったかのように，自分の中に残っていく。今度は，その経験が自分を助けてくれる。臨床家が自分でやれるケースは限られるが，ケースにコメントさせてもらったり，聞かせてもらったりしたケースの経験も加えていくと相当広くなる。それがスーパーヴィジョンや自分のケースを考える時に，役に立つことがある。だからスーパーヴィジョンやコメントをすることは，同時に自分の臨床を豊かにする。そうやって模擬体験を増やす。それが本当に役に立ちます」。

自分が行えるケースの数が限られていると，心理臨床家としての有限性を意識しておられる。そのためスーパーヴィジョンをはじめ，自分が行っていないケースでも，ケースに真摯に向き合い，考えることで,「自分がやったかのような模擬体験となる。今後は，その経験が自分を助けてくれる」と言われる。実際の臨床場面で，以前は上地先生に見えなかった視点が，最近見えてくるようになったという体験があったそうである。これは上地先生が日々，模擬体験を重ねる中で形成されてきた視点であると考えられる。次世代に専門性を伝えて行く中で，上地先生の専門性も深化していく過程がみられる。

心理臨床家の専門性の継承という視点からは外れるが，広い意味での次世代の育成として，上地先生は，学部生への卒論指導では研究や論文を作成するとはどういうことか,「ちょっと体験してもらう」「よき学部時代を送ってもらう」ことを意識している。学部生には「(女子学生が多いため) お母さんが卒論を書いた時はねって，子どもに語れるような人になって欲しい」と言う。この，次世代によい体験をしてもらいたいという思いは，上地先生自身の原家族との関係や，学生時代の体験が影響しているのではないだろうか。上述したように，父親との関係が悪く，悩みもがいた学生時代を送った上地先生にとって，院生時代には恩師をはじめ，よい父親，よい兄のような人と多く接したことが心理的な支えとなった。学部生への姿勢は，そのようなよき学生時代の体験を，次世代にも提供したいのではないかと考えられる。

総合考察

本研究の目的は，一人の心理臨床家のライフストーリーを詳細に検討することで，①心理臨床家としての専門性の生成，深化の過程，②自身の専門性を，次世代にどのように継承しようとしているか，を明らかにすることであった。心理臨床家としての専門性の形成，深化の過程については，まず，心理臨床の世界への関心を持ち，維持する原動力が必要となる。上地先生の場合は，ご自身

の悩みが原動力となっていった。専門性を形成するためには，カンファレンスや事例検討会のコメントを通して，心理臨床の雰囲気を感じ取る必要がある。ただし，それだけでは専門性の形成は不十分であり，恩師や先輩，スーパーヴァイザーへ理想化・同一化し，深く心理臨床の世界に没入していくことが必要である。中年期に入り，臨床家アイデンティティの危機を迎えるが，自身と向き合い続けることでアイデンティティを再確立し，専門性も深化していくと考えられる。

次世代への継承については，やまだ (2003) や竹内 (2012) が指摘するように，個人を越えて世代と世代をつなぐという意識が大事になってくる。個人を越えるとは，その心理臨床家独特の考えや，あり方を次世代に発信し，次世代に自分が生み出した考えを継承させることではない。あくまで先代から受け継いできた“経験”を次世代に伝えることである。そのような姿勢で次世代と関わる中で，次世代に伝えるだけではなく，次世代からも得るものがあり，自身の専門性の深化にもつながっていく。この繰り返しが，次世代に専門性を継承するということなのではないだろうか。

最後に，サブタイトルの“理想の心理臨床家の追及”という視点について考察したい。これは，研究目的である心理臨床家アイデンティティの形成と継承を検討するなかで，上地先生のライフストーリーを通して筆者が感じた視点である。学部時代の上地先生の悩みは，原家族の問題が絡むものであり，相当深刻なものであったと考えられる。その悩みから心理臨床への関心が生じた。心理臨床への興味・関心は，悩みの一部を克服させるほどの強い動機となった。しかし，ご自身が心理臨床家となり，クライエントを相手に心理療法を行っていくことには自信が持てなかった。大学院に進学してから，恩師をはじめ先輩など，理想的な男性モデルとなる方々と出会う。理想的な存在と同じ世界にいることは，誇らしいことであり，心理臨床の世界への没入を促すだけでなく，心理的な支えにもなった。これにより，心理臨床家としての自信と理想が高まっていったと考えられる。それゆえに中年期に入り，理想を維持できない現実に直面し，心理的危機を迎えたと考えられる。しかしご家族を重視した選択を行い，「心理臨床に軸足をおいた大学教員」であるとすることで，アイデンティティを再確立する。このことは同時に，こうでなければ心理臨床家とは言えない，という心理臨床家への理想の高さを含んでいると推察される。しかし心理臨床家の専門性とは，単なる人生経験や臨床実践経験の長さや量，熱意や情熱を超えて，生涯学習的な教育研修によって培いながら維持向上を図るところにあり (藤原，2012)，生涯，高い志を持ち，専門性を高める努力をしなければならない (清水・村瀬・大塚，2009；鑪，2000)。上地先生が心理臨床家への理想を高く持ち続け，生涯その専門性を向上しようと努力を続ける姿勢は，心理臨床家の専門性の基本的な姿勢であると考えられる。

その後のナラティブの変化

筆者が本論文を作成し，上地先生に校閲していただいた後，上地先生から面接調査後のナラティブの変化として，以下のようなご意見をいただいた。

上地先生は 2010 年に学位取得後，次の目標を見出せず，面接調査の時には，やや停滞した気持ちで生活されていた。しかしその後，公私を含めて過去をふり返り，自分の人生はこれでよかったのかと考えられた。その過程で，大学院博士課程時代に重篤度の異なる自閉症の子どものケースに複

数関わり，幼児期の子どもの臨床に関心が向いていたことや，関連する読書会をしていたことが，しきりに思い出されるようになった。そこで，以前から細々と勉強されていた愛着理論と精神分析を統合した発達臨床の視点である「メンタライジング」に基づく心理療法への関心が深まった。現在では，メンタライジングに関連する仕事をなさっている。

また私生活では，お子さんの障がいやその対応など，思い通りにならないこともご自身の人生の一部と思われるようになった。この背景には，宗教の影響があると言われる。上地先生は，大学学部時代は，仏教に傾倒していたが，その後はキリスト教に関心を持たれるようになった。しかし，お子さんの障がいなど「人生の試練」に取り組むなかで，「人生は苦 (思い通りにならないもの) である」という，一見単純に見えて奥深い仏教の言葉が支えとなった。上地先生の「子どもの障がいを含めて自分の人生をどう考えたらよいか」という質問に，真摯に答えてくれたチベット仏教の師が宗教面での支え，鑪先生が職業生活での支えとなっている。

以上から面接調査時点では，上地先生は長い心理臨床家アイデンティティの危機を抜け，臨床に軸足を置く大学教員としてのアイデンティティを再確立されたばかりであったと考えられる。面接調査後は，職業だけではなく，ご自身の人生全体をふり返り，青年期に興味を持ちながらも離れていった子どもの臨床や仏教に，再度，関心を持たれるようになった。メンタライジングへの関心は心理臨床家としての専門性を，仏教は上地先生の人生そのものを深化させる原動力となっている。上地先生の面接調査後のナラティブの変化から，生涯，自分の人生をふり返り，思い通りに行かないことにも向き合う姿勢は，専門性のみならず，その個人の人格全体を深化させることが表れている。

付記

本研究は，岡山大学大学院教授 上地雄一郎先生に予め校閲をいただき，論文化の許可を得た。お忙しい中，面接調査に快く応じていただき，ご自身の経験を語っていただいた上地雄一郎先生に心よりお礼申し上げます。

引用文献

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
(エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977, 1980). 幼児期と社会 1, 2　みすず書房)

Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton.
(エリクソン, E. H. 岩瀬庸理 (訳) (1969). 主体性 (アイデンティティ) ――青年と危機――　北望社)

藤原勝紀 (2012). 専門教育, 資格試験, 専門業務　財団法人日本臨床心理士資格認定協会 (監修) 新・臨床心理士になるために　平成 24 年版　誠信書房　pp. 11-41.

皆藤　章 (2012). 養成大学院教育における「学び」と「質」の補償　日本臨床心理士養成大学院協議会報, **16**, 1-2.

上地雄一郎 (2005). 境界例に対する抱えと共感に基づく心理療法の事例　心理臨床学研究, **23**, 1-11.

岡本祐子 (1985). 中年期の自我同一性に関する研究　教育心理学研究, **33**, 295-306.

岡本祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開　ミネルヴァ書房

岡本祐子 (2011). 陶器職人における専門家アイデンティティの生成と継承Ⅱ――島袋常秀工房の師弟関係から見た世代継承性のミクロな分析――　広島大学心理学研究, **11**, 173-187.

清水　潔・村瀬嘉代子・大塚義孝 (2009). 指定大学院・専門職大学院と求められる臨床心理士像　大塚義孝 (編)　こころの科学――臨床心理士養成指定・専門職大学院ガイド 2009――　日本評論社　pp. 2-12.

竹内一真 (2012). 「経験の伝承」における生涯発達的視点からの先行研究の検討――generativity 研究に焦点を当てて――　京都大学大学院教育学研究科紀要, **58**, 383-395.

鑪　幹八郎 (2000). 心理臨床家の現況とアイデンティティ　鑪　幹八郎・名島潤慈 (編)　心理臨床家の手引　新版　誠信書房　pp. 1-16.

鑪　幹八郎 (2004). 鑪幹八郎著作集 3　心理臨床と倫理・スーパーヴィジョン　ナカニシヤ出版

やまだようこ (2003). 訳語について (生成継承性 generativity の項)　やまだようこ・西平　直 (監訳)　エリクソンの人生――アイデンティティの探求者――　新曜社　pp. 106-107.